

保 育 者 の 言 語

—— おお ことばをめぐって —— (1)

酒 井 憲 二

- 1 まえがき
—幼稚園ことばとミオミことば—
- 2 ミオミことばの系譜
—ことにその女性語との関連—
- 3 ミオミことばの実態(1)
—現代語辞典の登載するミオミことば—
- 4 その考察

1

幼児の言語教育を考えるには、まず、指導者の言語を検討し反省して見る必要があることは言うまでもありません。保育者がつねに言語に関心を持ち、正しい知識を身につけて日本語に対する意識を高めて行くことが、そのまま、幼児の言語感覚を養い、国語愛の精神を育てる道につながるのです。なぜなら、人間の言語は生得のものではなくて、日々、幼児は、保育者の言語を聞きそれを模倣して学習し習得して行くのですから。しかも、言語形成期として生涯でもっとも大切な時期にあたるのです。この分かりきった平凡な事実に立脚して、時に及んではこの原点に立ちかえってみることが肝要と思われます。

ところで、保育者の言語が問題になる場合、きまって採りあげられるのがミオミのつけすぎの問題でしょう。

…なんにでも「お」をつけたがるのが、幼稚園や保育園の先生に、共通しているようである。ずっと前のことだが、私の園でひとりの先生が、「おピアノがこわれたので、おオルガンでおけいこしましょう」と、どもるようにいっているのを、きいたことがあるが、「お」をつけさえすれば、よいこばになると

いうのではない。「お幼稚園」「お学校」というようなことばを使って、上品ぶっているのは、むしろこっけいである。

代表的な教科書である『幼児の言語教育』（幼児言語教育協議会編）の著者は、このような記述で「敬語の乱れ」を指摘しています。また、『幼児の言語指導』（教師養成研究会編）の著者も次のように述べて慨嘆しています。

…幼稚園での「お」の乱用はすでに定評がある。「お洋服」「お机」などはまだまだよいとしても、「お絵かきしましょう」や「お始まりになっちゃう」などという珍妙な日本語が横行していて、しばしば批判のまとなっている。「絵をかきましょう」「始まっちゃう」で、りっぱな日本語なのに、なぜわざわざ日本語を乱すのか。…それでよいと思って同調している母親もあるのだろうが、それをよいことにして、まだあとを絶たないのは困ったことである。

同書の旧版では、次のような報告も紹介していました。

ある子どもが、絵本のリンゴの絵に添えてある字を「オリンゴ」と読もうとして、苦勞していたと、ある幼稚園の教師が報告している。「お」の乱用は、このように、幼児の言語学習に、大きな支障となることを知らなければならない。

と。たしかに、ある面では、目にあまるというか、耳ざわりな過度のミオミことばが使用されているようです。『言語生活』（国立国語研究所監修・筑摩書房発行）には、「生きたことばを忠実に文字化」という「録音器」のページがあって、毎号、いろんな場面での話しことばを載せていますが、幼稚園での話の記録ときれい

どころの温習会での話の記録がミおミことば過多の双壁とされています（岩淵悦太郎氏編『ことばの現代風景』）。また、私は例年、「言語」の最初の時間に、学生の言語に関する簡単な調査をしています、「現代の国語についての所感」では、敬語の乱れ、ことにミおミことばの氾濫を指摘するものが最も多く、過半数に及ぶのが常です。もっとも、これらには、ミおミことばが誰にも気づかれやすいという面も影響あるものと思われます。外面的に目だつというか耳だちやすい言語形式であるからこそ、意識的に競って、あるいは無意識に手軽に使用されるとも考えられるからです。この点については後ほどさらに論及するところがあると思います。

とにかく、世間で「幼稚園語」といい「保育者ことば」と呼ぶところの一種独得な言語体系の中核をなすのはこのミおミことばであるようです。日名子太郎氏はこの幼稚園ことばを次の6種に分類されました（『いわゆる『幼稚園ことば』について』『言語生活』第115号）。

- ① ていねいなことば 「おみずをのむ時は順序よくならんで下さい」「さあ、おそとに出ましょね」「おべんとうは、こぼさないでいただきます」「おねつがあるんじゃない？ すこし、おかおが赤いようね」「おすべり（スベリ台のこと）の上の人」など。
- ② 尊敬したことば 「おはいりなさい。そこ、さむいでしょう」「さあ、朝のごあいさつをしましょう」「お坊ちゃん」「お嬢ちゃん」など。
- ③ 動詞を名詞化して用いることば 「お絵かきの仕度をしましょう」「みんな、はやく、おこしかけましょね」「ばら組さん、おはじまりですよー」「お集まりですよ、早くいらっしやい！」など。
- ④ 擬人化したことば 「そんなひどいことをすると、お椅子さんが泣きますよ」「そんなに乱暴にたたくと、おピアノさんが、いたい、いたいって、いいですよ」など。
- ⑤ 位相語（乳幼児） 「おめめをとじていのりましょ」「なんて、きたないおて

てしているんでしょう」「もっと、おみをきれいにそろじしておきましょね」「さあ、おつむにてをやってください」など。

- ⑥ 位相語（女性） 「おてあらに行きたいひとは、早くいっていらっしやい」など。

まことに明快な分類であって、問題のありかもおのずから明らかであります。すなわち、①と⑥からは、幼稚園教師が女性のみである問題（従って女性語一般の問題でもあります）が引き出せるでしょう。さらに、②からは、一部富裕階級の子弟の保育機関として発達してきたわが国幼稚園の伝統の問題、④⑤からは、幼児の対遇の問題、つまり、アニミズム（物活論または汎心論）も見られる、幼児語も持っている彼等の、発達段階に応じた配慮の問題などが指摘されるでしょう。勿論、園で使用される歌曲の歌詞や、絵本・童話などの言葉の影響も無視できないと思います。しかし、所詮は、日常茶飯にくりかえされる幼稚園教師の、または家庭での母親や家族のことばの影響力には及ばないでしょう。高橋巖氏も言われるように（『幼児の言語と教育』教育出版センター）「保育者の過度の緊張感、つまり幼児を必要以上に幼ないものと意識する」ことこそ問題なのでしょうから。

以上の6分類のうち、もっとも問題なのは③の場合と思われます。俗に「幼稚園ことば」として悪名の高いのも、まさにこの「動詞をむやみに名詞化して用いる傾向」（日名子氏）にあるようです。前掲の教科書『幼児の言語指導』は「珍妙な日本語の横行」と論難し、高橋氏も前掲書で「ミお絵かきしてミおならびしてミなどは明らかに弁護の余地のない正しくないことば」と論断しておられます。

はたして弁護の余地のない悪いことばでしょうか。もしそんなに悪いものならば一刻も早く無くさなければならない、それこそ私たち国語の学問と教育にかかわるものの責務でもありましょ。そう思って、これらミおミことばをめぐる問題を採りあげることにしたのです。無くならないどころか、ますます跋扈し跳梁しているという、その実態はどうなのか、またそれはどこから来ているものなのか等々、多少の調査

と考察を加えてみようというわけです。

2

ミおミことば とは、いわゆる敬語の接頭辞「お」のついた語 という意味です。この接辞「お」は、普通、「オホミ→オホソ→オン→オ」と変化してできた語」(広辞苑)と説かれます。オホミは「オホ(大)+ミ」であって、そのミは、

美蘇良行く雲にもがもな けふ行きて妹に言
問ひ 明日かへり来む (万十四, 3510)
の「ミ空」のように、おそらくは軽く添えてそのもの(空)をほめたたえ、かつ、それによって、語調を整える語であったのでしょう。それが、神や天皇など、その物の所有者や関係者が尊敬・畏敬すべき人である場合に多く接して敬語の接頭語となり、程度を強めて類義の形状言オホを重ね、オホミを生じたものと考えられています。先進文化国であった隣国から漢字を移入して、国語を文字表現化した際、たとえばすでに法隆寺金堂薬師光背銘(607年)に見られるように漢文に無い用字法によってこの特有の敬語に意を用いたことは顕著な事実です。

大御身勞賜時……大御病太平欲坐故…

このことは記紀・万葉についても言え、ことに祝詞・宣命では独得の表記法を確立するわけですが、かなを考案して、より自由な国語表現が可能になった平安時代、特に宮中に仕える女官たちによって一層推し進められたのです。

いづれのおほん時にか女御更衣あまたさぶら
ひたまひけるなかに、いとやむごとなききは
にはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり
(源氏物語冒頭)

源氏物語ばかりでなく、古写本における尊敬の接辞は、書記上の経済もあってか、漢字「御」で書かれていることが普通ですが、仮名書きになっている場合は平安時代のものには「おん」はほとんど見えず、「おほん」が多く見られます。「お」は「おまへ・おほし・おもと・おもの」の4語にほぼ限定され、「ご」や「み」も特殊な語に固定しているようです。

「おほん」は、いうまでもなく「おほみ」の音便ですが、この間の事情を含めて、『玉かつ

ま』で本居宣長の説くところを聞いてみましょう(筑摩版『本居宣長全集』第一巻435べ)。

御の字のこと、もろこしにては、その国の王の事ならではいはず、臣下にいへることなし、此字すなはち王の事をさしていへるが如し、皇国にては、みといふに此字をあてたれど、御は天皇にかぎらず、もとより下々にても尊みて広くいふ言なり、大御といふぞ、大かた天皇にかぎりていへる、(中略)されば大御といふは、もろこしの御の字のつかひざまに近し、さて後には大御を音便におほんといひて、天皇にかぎらず広くいふこととなり、又その後には、そのおほんのほを省きて、おんといひ、後には又んをも省きて、おとのみいふ、今の俗には物に書ては、御の字をおんといへども、口語にはおとのみいへり(後略)

平曲が伝える平家物語の読みかたなどから推定しますと鎌倉時代は「おん」の時代、謡曲や狂言、すなわち室町時代にいたって漸次「お」に移っていったものと思われます。それにしても宣長の時代にも、「物に書きては」、つまり文章語としては「おん」であることは、今日でも、たいへんあらたまった場面でそうであることと一般です。キリシタンの代表的な語学者ロドリゲスは、敬語接頭辞の用法についてもくわしい観察・記述をしています『日本大文典』(1604年、長崎学林刊)には次のように見えます。

Von (おん) は書きことばや、説教のやうな莊重な話しことばに使はれ、Vo (お) は話しことば並に日常の会話に使はれるが、何れもミよミミの言葉では一般に行はれるものである。Mi (み) は話しことばと書きことばに使はれるが、特定の限られた語に接続する。

(土井忠生氏訳本, 570べ)

また、その用法についても「御馬一匹進じそろ」と「御馬は見事にそろ」の2例をあげ、前者は「そなたへ差上げる私の物」、後者は「そなたの物」との違いであることを指摘し、「御奉公申上げたい」の「御奉公」は(お為の、又は、お身様に対しての奉公)、「おゆかしう存ずる」は(お事をゆかしう存ずる)意の用法であることを説明しているのです。(同書572~573

べ)。平安朝や鎌倉時代の「御」はどこまでもいわゆる尊敬語であって、相手乃至尊敬すべき第三者の事物についたのですけれども、この期に、ミ相手を考慮する立場で、本来は話し手に属するものにまで「御」をつけるミいわゆる謙讓的表現が発達したことに注目しているわけです。

一方、室町時代のはじめころ、御所や仙洞御所に奉仕する女房たちの考案にはじまるミ女房ことばミには、異名だけでなく普通語に「御」を冠する例が見えます。將軍義政時代の大上臈の名などを記した『大上臈御名之事』(群書類従巻第414)には

御だいくご おなか 御しる 御まはり 御
さかな 御まな 御しゃうじ物 おひら …
おひやし … おゆ 御あし …

などをあげた後に

らつそく むしろ かたな たたみ まめ
ふで すずり しゆす すみ あふぎ うち
は はんぞう かゆ

皆此たぐひ 御もじをそへていふよし

としているのです。きわめて限られた言語圏内から発生したこれらのミおミことばは、優雅上品な表現として一般化して行くわけですが、その際、その丁寧語的な要素を一層強化増大することになります。

足数におあし添へて召されよや(声刈)

さてお肴はなにになにぞ(大江山)

などの謡曲の対話の部分などに、その具体的な様相をみる事が出来ます。

こうして室町時代の末期には、ほぼ今日と同じ程度にまでミおミは一般化していたものと思われるのです。

ただし、起源的にはすべて一様ではなく、平安朝以前の「お」(おまへ・おまし・おもの等)は「おほ」(大)から出たのであって、室町以降の通説の「お」と峻別すべきことが、辻村敏樹氏の精緻な御研究によって明らかになりました(「敬語接頭辞の『お』について」『敬語の史的研究』所収)。もし両者の間に関連があるとすれば、中世以後の「お」が発生する時にその誘導をしたということです。

江戸時代にはいわゆる往来物をはじめ初等教育関係の出版物も数多く板行されましたが、元

禄5年板『女重宝記』は女子用の言語教科書としてもっとも古いものの一つです。そこには、

男の詞つかひを女のいひたるは耳にあたりて
聞にくきものなり 女のことばはかた言まじ
りにやはらかなるこそよけれ…よろづの詞に
おと、もじとをつけてやはらかなるべし

として

内の者 又は 下々といふべきを
家来 又は 下人といふはあしく
おく様 御内さまなどいふべきを
内義 内室 など いふはかたし

の類の、つつしむべき言葉づかひを並べ立てた後に、

女のやはらかなる詞つかひといふは
子どもを おさなひ といふ
子どもたちを お子たち と云
なくを おむつかる ねるを おしづまり
おきるを おひるなる かみあらふを 御
ぐしすます

などの例31語をあげて好ましい言葉づかいとしているのですが、その3割強はミおミことばです。「おと、もじとをつけてやはらかなるべし」と言いながら、「やはらかなる詞つかひ」の項にはミもじミことばは1例も見えず、次の「大和詞」(従来の女房詞)108語の中に

おびは おもじ ゆぐは ゆもじ
むぎは むもじ のりは のもじ
くきは くもじ すしは すもじ
たこは たもじ いかは いもじ
ゑびは ゑもじ しやくは しやもじ

の10語を掲げるに過ぎません。言うまでもなく「もじは文字なり」で、概してその語の最初の一音に「もじ」を添えて婉曲に、すなわち「やはらかく」表現したのですが(「ほの字」と言うも同巧)、今日では、添え毛の「かもじ」以外には、「ひもじい」や「お目もじ」がミもじミことば出自であることを知る人もまれで、一般にミもじミことばは漸次衰え、ミおミことば全盛となって現在に及んでいるものと思われます。

3

室町時代の女房ことばに発するミおミことばが何百年後の今日まで生き残り、しかも、ます

ます勢力を拡張して、識者の聲望を買う「幼稚園ことば」などにまで至っているのは、まことに興味深い現象ですが、単に女性語であるに止まらず、男性も含めて広く一般に用いられている語も相当あります。勤め帰りに一杯ひっかけながら「おいしいおでんですな」などと言っている人があるとすれば「おいしい」「おでん」も立派な女房ことばです。「おいしい」はもと

いしうも申させ給ふ田代殿かな

(平家物語巻九)

イシウモ宣ヒタリ

(太平記巻九)

など軍記類に見えるばかりでなく、古くは日本書紀の古訓にまであり(巻四綏靖紀)，キリシタンの『日葡辞書』(1603年，長崎刊)には「美味なこと，又は，味のよいこと」として特に「この意味ではとりわけ婦人が用いる」と注しているところの，イシイのミオミことばなのです。「おでん」も田楽の女房ことば「でん」のミオミことばであり，共に江戸後期の滑稽本『浮世床』・『浮世風呂』や『膝栗毛』などではおなじみの語です。「おなじみ」と「なじみ」(「～の芸者」など)ではややニュアンスが違いうように，「お」のあるなしで意味の分担の異なる語もいくつもあります。「おにぎり」(握り飯)と「にぎり」(握りずし)，「おひや」(冷たい飲み水)と「ひや」(冷酒)，「おつり」(釣銭)と「つり」(魚釣)，「おつけ」(味噌汁)と「つけ」(掛け払い)等々。この種のミオミことばは，「お」を固定化した形で もはや一般普通語の中にとけ込んでしまっているのです。

次の表は，現代語の中で一般語彙として用いられているこの種のミオミことばを拾い出してみたものです。範囲を，現代語の国語辞典に搭載されている語とし，三省堂国語辞典および明解国語辞典を基礎として，岩波国語辞典・講談社国語辞典ならびに広辞苑の掲載語を勘案して加えました。一往の基準と見なし得ると思います。1語1行に納めるべく，①見出し，②()内に漢字，③用例もしくは簡単な語釈を示しました。続いて，三省堂国語辞典で位相語(特殊用語)としての〔女〕(＝女性語)の指定あるもののうち，女房ことば起源のものには《女房詞》，〔児〕(＝児童語)は多く幼児に向かって使う女性語でもあるので《幼児女性語》と記し

ました。その他，あいさつ語などをも《 》内に示しました。《女房詞》は真下三郎氏の『女性語辞典』(昭和42年，東京堂)と広辞苑の指定などを参考にしました。最後に，江戸時代以前の文献に用例の見える語には〔 〕内にその書名を略記しました。狂言記は〔狂言〕，日葡辞書は〔日ポ〕，古本節用集類を〔節用〕とする類です。スペースの無い場合は，浄瑠璃など極端に簡略にしたものもあります。

現代語辞典の登載するミオミことば

おあいそ(御愛想)「～を言う」

おあいにくさま(御生憎様)《あいさつ語》

おあし(御足)銭《女房詞》〔狂言〕

おあずけ(御預け)「～をくう」

おあんばい(御塩梅)「～はいかが」

おいえ・おいえげい(御家芸)〔膝栗毛〕

おいしい〔←いしい〕美味

《女房詞》〔浮世床〕

おいた〔←いたずら〕《幼児女性語》

おいた(御板)〔関西で〕かまぼこ《女房詞》

おいで・おいでる(御出でる)〔狂言〕

おいど(御居処)〔関西で〕腎

《女房詞》〔日ポ〕

おいとしい(御愛しい)《女房詞》

おいわい(御祝)「～の品」

おうす(御薄)〔←薄茶〕《女房詞》

おうた・おうたかい(御歌会)「～始の儀」

おうち(御内・御家)〔狂言〕

おうつり(御移り)贈物の返礼品《女性語》

おうらさま(御裏様)裏方

おえしき(御会式)「～の万灯」

おえらがた(御偉方)「～の前で」

おかあ・さん(さま)(御母様)

おかいこ(御蚕)「～ぐるみ」〔博多小女郎〕

おかえし(御返し)返礼・返報

おかか〔←かか＝鰹節^{かつおぶし}の頭音の重ね〕

《女房詞》

おかかえ(御抱え)「～の運転手」

おかがみ(御鏡)〔←鏡餅〕

《女房詞》〔会稽山〕

おかき(御欠き)〔←かきもち〕《女房詞》

おかぐら(御神楽)かぐら。二階を増築

おかくれ（御隠れ）逝去《女房詞》

おかけ（御掛）〔←掛蒲団〕

《女房詞》〔浮世風呂〕

おかげ（御蔭）「～（さま）で」〔狂言〕

おかざり（御飾り）しめかざり〔狂言〕

おかしら（御頭）親方〔盧生夢魂〕

おかず（御数）〔←数々あり〕

《女房詞》〔日ボ〕

おかた（御方）「あの～」〔狂言〕

おかちん〔←かちん＝^{かちひ}搗飯〕餅《女房詞》

おかっぱ（御河童）「～あたま」

おかどちがい（御門違い）見当ちがい

おかね（御金）「～にして…円」

おかぶ（御株）「～を奪われる」〔梅暦〕

おかま（御釜）かま（ど）。男色（の相手）

おかまい（御構い）「～もできませんが」

おかみ（御上）役所。女将「～さま」〔狂言〕

おかめ（御亀）「おたふく～」〔四方山人文〕

おから〔←豆腐のから〕《女房詞》

おかわ（御厠）〔←おかわや〕便器《女房詞》

おかわり（御代り）「ごはんの～」

おかんばん（御燭番）「～をつとめる」

おかんむり（御冠）「きょうは少し～だ」

おきにいり（御氣に入り）「社長の～」

おきのどくさま（御氣の毒様）《あいさつ語》

おきまり（御決まり）「～のコース」

おきゅん（御俠）〔キャンは唐音〕

〔←俠太平記〕

おぎょう（御形）ハハコグサの七草での称

おぐし（御髪）「～上げ」《女房詞》〔日ボ〕

おくに（御国）「～じまん」〔狂言〕

おくら（御蔵）「～入り・～にする」

おくるみ（御包み）「赤ん坊の～・～人形」

おこうこ（御香香）〔←香＝香の物〕

《女房詞》

おこえがかり（御声掛り）「社長の～で」

おこげ（御焦げ）焦げた飯《女性語》

おこさま（御子様）「～は何人？」

おこし（御越し）「～は何時？」〔長巳之園〕

おこし（御腰）〔←腰巻き〕《女房詞》

おこしいれ（御輿入れ）

〔←輿入れ〔甲陽軍鑑〕〕

おこそずきん（御高祖頭巾）

〔一説←^{おくそ}芋屑頭巾〕

おこた〔←こたつ〕《女房詞》

おこたち（御子達）〔関西で〕

子供達《女房詞》

おことぞえ（御言添え）「～を願います」

おことわり（御断り）「押売～」

おこのみ（御好み）「～焼き・～食堂」

おこも（御薦）こじき《女性語》

おこもり（御籠り）参籠

おこわ（御強）こわめし《女房詞》〔女夫池〕

おぞ（御座）「～をとりもつ・～がさめる」

おさい（御葉）副食物

おさがり（御下り）「～をいただく」

おさき（御先）「～まっくら」〔狂言〕

おさきぼう（御先棒）「～をかつぐ」

おさげ（御下げ）「～髪・～の少女」

〔浮世風呂〕

おざしき（御座敷）「～がかかる」〔狂言〕

おさだまり（御定り）「～の文章」〔一代女〕

おさつ（御札）紙幣

おさつ（御薩）〔←薩摩芋〕《女房詞》

〔浮世風呂〕

おざつき（御座付）芸者の、宴席での最初の唄

おさと（御里）「～が知れる」〔浮世風呂〕

おざなり（御座成り）「～な仕事」

おさむい（御寒い）「～計画」

おさらい（御浚い）「～をする・～会」

おさらば《あいさつ語》〔寿門松〕

おさん（御産）出産

おさんかた（御三方）三人

おさんじ（御三時）おやつ

おさんどん〔←御饗・お三〕女中〔江戸語〕

おじい・さん（さま）（御祖父様・御爺様）

おしおき（御仕置）〔御定書百箇条〕

「～もの」

おしかり（御叱り）〔←しかり〔同上〕〕

おじぎ（御辞儀）「～無しに・～草」〔狂言〕

おしきせ（御仕着せ・御四季施）〔永代蔵〕

おしたし（御浸し）〔←おひたし〕《女性語》

おしたじ（御下地）しょうゆ《女房詞》

おしちや（御七夜）「～の祝」

おしのび（御忍び）〔←忍び歩き〕〔狂言〕

おしぼり（御絞り）「～を出す」

おしまい（御仕舞）「もう～か」〔鍵権三〕

おしめ（襦袢）〔←しめ＝^{しめ}湿し〕《女性語》

おしめり（御湿り）「いい〜で」《女房詞》
おしも（御下）用便「〜の世話まで」《女性語》
おじや〔←じや=煮える音？〕雑炊《女房詞》
おしゃか（御釈迦）不良品「〜になる」
おしゃく（御酌）酌。半玉〔謡曲〕
おしゃぶり〔←しゃぶりこ〕ねぶりこ
おしゃべり（御喋り）〔浮世風呂〕
おしゃま ませた（女の）子
おしゃもじ（御杓文字）《女房詞》
おしゃれ（御洒落）「〜をする・〜コーナー」
おじゃん〔←じゃん=鎮火の半鐘〕

「〜になる」

おじゅう（御重）重箱
おじょう・さん（さま）（御嬢様）〔和訓栞〕
おしろい（白粉）〔←白いもの〕

《女房詞》〔節用〕

おしんこ（御新香）つけもの
おす（御酢）酢《女性語》
おすそわけ（御裾分け）〔←すそわけ〔日ボ〕〕
おすべらかし 下げ髪的一种（皇族の正装）
おすまし（御澄まし）すまし（汁）《女性語》
おすみつき（御墨付き）〔東海道四谷怪談〕
おすもじ（御酢文字）すし《女房詞》
おせじ（御世辞）「〜たらたら」
おせち（御節）「〜料理」〔俳諧御傘〕
おせっかい（御節介）〔せっかい=狹匙・切匙〕
おせん（御煎）〔←せんべい〕
おぜん・おぜんだて（御膳立て）「〜は出来た」
おそうそうさま（御草草様）《あいさつ語》
おそしさま（御祖師様）開祖
おそなえ（御供え）〔←供え物〕鏡餅《女房詞》
おそば（御側）「〜へ上がる・〜付き」〔狂言〕
おそまつさま（御粗末様）《あいさつ語》
おだ〔←おだいもく〕「〜をあげる」
おたあさま〔←^{たい}対の屋〕〔宮中で〕母上

《女房詞》

おだい（御代）代金
おたいこ（御太鼓）「〜結び」
おだいし（御大師）「〜様」
おだいじん（御大尽）金持
おだいもく（御題目）「〜だけは立派だが」
おたいら（御平ら）「どうぞ〜に」
おたかい（御高い）「お高くとまる・〜人」
おたがい（御互）「〜が力を合わせる・〜さま」

おたから（御宝）お金《女房詞》
おたく（御宅）「〜では・〜さま」
おたずねもの（御尋ね者）〔薩摩歌〕
おたち（御立ち）「〜は明日」
おたっし（御達し）「〜はまだ無い」
おたな（御店）「〜者」
おたびしょ（御旅所）「御輿の〜」〔寿門松〕
おたふく（御多福・阿多福）「〜かぜ」〔柳宮〕
おだぶつ（御陀仏）「ついに〜」〔膝栗毛〕
おたま（御玉）たまご《女性語》
おたまじゃくし（御玉杓子）「〜は蛙の子」
おたまや（御霊屋）みたまや
おため（御為）「〜になる・〜ごかし」〔謡曲〕
おたんじょう（御誕生）誕生日
おちご（御稚児）「〜さん」《女房詞》〔狂言〕
おちゃ（御茶）「〜うけ・〜菓子・〜屋」

〔狂言〕

おちゃっぴい〔←お茶ひき〕〔浮世風呂〕
おちゃのこ（御茶の子）「〜さいさい」

〔反魂香〕

おちょうし（御銚子）「〜立て」〔畠山御成〕
おちょうし（御調子）「〜に乗る・〜者」
おちょうず（御手水）「〜所」《女房詞》

〔狂言〕

おちょぼぐち〔←ちょぼ=小さい意〕

おつき（御付き）「〜の人」
おつぎ（御次）「〜の間・〜の番」〔狂言〕
おつくり（御作り）〔←作り物〕

さしみ《女房詞》

おつけ（御付け）汁《女房詞》〔日ボ〕
おつげ（御告げ）「神の〜」〔狂言〕
おつとめ（御勤め）「朝の〜・〜する」

〔一代女〕

おつぼぐち（御壺口）おちょぼ口
おつまみ（御摘み）〔←摘み物〕
おつむ〔←つむり〕あたま《女房詞》
おつもり（御積り）「もう〜にしよう」

〔万句合〕

おつや（御通夜）「〜のお経」
おつゆ（御汁）（すまし）汁《女性語》
おつり（御釣り）つり銭
おてあげ（御手上げ）「こうなれば〜だ」
おでき（御出来）できもの
おでこ（御凸）「〜の広い人」

おてしょ〔←御手塩皿〕小皿《女房詞》
おてだま（御手玉）「～で遊ぶ」
おてつき（御手付き）「～札」
おてつだい（御手伝い）「～さん求む」
おてて（御手手）《幼児女性語》
おてのうち（御手の中）「～拝見」

〔鈴森対霈杭〕

おてのすじ（御手の筋）うまく当てること
おてのもの（御手の物）得意のわざ
おてまえ（御手前・御点前）茶の湯の作法
おでまし（御出座）お出かけ
おてもと（御手許）箸《女房詞》〔狂言〕
おてもり（御手盛り）〔←手盛り〔一代男〕〕
おてやわからに（御手柔かに）《あいさつ語》
おてら・おてらさま（御寺様）〔狂言〕
おでん〔←でん＝田楽〕《女房詞》〔膝栗毛〕
おてんき（御天気）「～屋・～娘」
おてんとさま（御天道様）太陽
おてんば（御転婆）「～娘」〔俚言集覧〕
おとう・さん（さま）（御父様）
おとおし（御通し）〔←通し物〕「～三つ」
おとき（御斎）仏事の食事
おとぎ（御伽）「～衆・～草子」《女房詞》
おとぎばなし（御伽噺）「幼児に聞かせる～」
おとくい（御得意）「～まわり・～さん」
おとしだま（御年玉）〔←としだま＝年賜〕
おとそ（御屠蘇）「～を祝う」
おとも（御供）「～の人」〔節用〕
おとりさま（御酉様）「～の熊手」
おとりぜん（御とり膳）男女さし向かいの膳
おなおり（御直り）上級の席などに移ること
おなか（御中）腹《女房詞》〔日ボ〕
おながれ（御流れ）「～をいただく」〔狂言〕
おなぐさみ（御慰み）「うまくいったら～」
おなじみ（御馴染み）「皆様～の…」
おなみだ（御涙）「～頂戴」

〔天草伊曾保・平家〕

おなら〔←鳴らす〕屁〔福富草紙・醒睡笑〕
おなり（御成り）お出かけ〔節用・日ボ〕
おなんど（御納戸）「～色・～役」〔男色大鑑〕
おにぎり（御握り）〔←握り飯〕《女性語》
おぬし（御主）おまえ〔狂言・日ボ〕
おねしょ〔←寝小便〕《幼児女性語》
おねば（御粘）《女性語》〔ヘボン〕

おねり（御練り）「祭礼の行列の～」
おのぼりさん（御上り様）〔意気客初心〕
おは（御葉）菜の葉《女性語》
おばあ・さん（さま）（御祖母様・御婆様）
おはぎ（御萩）ぼたもち《女房詞》〔柳樽〕
おはぐろ（御齒黒）〔←齒黒め〕《女房詞》
〔運歩〕

おばけ（御化け）〔←化け物〕《女性語》
おはこ（十八番）〔←お箱〕得意（の芸）
おはこび（御運び）「わざわざ～いただいて」
おはじき（御弾き）〔←はじき〔二代男〕〕
おはち（御鉢）「～が回る」《女房詞》
〔浮世床〕

おはつ（御初）「～にお目にかかります」
おはつお（御初穂）《女房詞》〔五人女〕
おはづけ（御葉漬け）菜漬け《女房詞》
おはなばたけ（御花畑）「高原の～」
おはね（御跳ね）おてんば《女性語》
おはもじ（御は文字）はずかしい《女房詞》
おはよう（御早う）《あいさつ語》
おはらい（御払い）「～物」〔十二段〕
おはらい（御祓い）「～箱」〔今川大双紙〕
おはり（御針）「～子」〔浮世床〕
おひいさま（御姫様）〔←おひめさま〕
おひきずり（御引摺り）

〔←引摺り〔浮世風呂〕〕

おひざおくり（御膝送り）「順に～願います」
おひさま（御日様）太陽《幼児女性語》
おひざもと（御膝下）「将軍様の～」

〔柳樽拾遺〕

おひたし（御浸し）〔←ひたしもの〕《女性語》
おひつ（御櫃）めしびつ《女房詞》
おひとかた（御一方）一人
おひとよし（御人好し）好人物
おひなさま（御雛様）雛人形《幼児女性語》
おひねり（御捻り）「祝儀の～」
おひめさま（御姫様）姫
おひや（御冷）〔←おひやし〕《女房詞》

〔狂言〕

おひゃくど（御百度）「～を踏む」〔小町踊〕
おひら（御平）〔←ひらわん〕《女房詞》
おひらき（御開き）「～にする」〔謡曲〕
おひる（御昼）昼食〔日ボ〕
おひろい（御拾い）徒歩《女房詞》〔日本武尊〕

おひろめ(御披露目)〔←お広め〕《女房詞》
 おぶう《幼児女性語》お湯・お茶
 おふくろ(御袋)「～様」《女房詞》〔日ボ〕
 おふくわけ(御福分け)〔←福分《嬉遊笑覧》〕
 おふせ(御布施)〔狂言〕
 おふだ(御札)おももり〔謡曲〕
 おふたかた(御二方)「～さま」
 おふでさき(御筆先)「教祖様の～」
 おふみ(御文)〔狂言・諸国咄〕「～さま」
 おふる(御古)〔←古着〕《女房詞》〔日ボ〕
 おふれ(御触れ)「～書」〔三世相錦繡文章〕
 おへやさま(御部屋様)〔今宮心中〕
 おぼん(御盆)「～の帰省列車」
 おまいり(御参り)〔狂言〕
 おまえ(御前)「～さん」〔傾城觸〕
 おまけ(御負け)「～の品・～に」〔浮世床〕
 おまじり(御交り)飯粒まじりのおもゆ
 おます(御座す)〔関西で〕ございます〔狂言〕
 おませ〔←ませる〕「～の女の子」
 おまちどおさま(御待遠様)《あいさつ語》
 おまつり(御祭)「～さわぎ」
 おまもり(御守)「交通安全の～」〔万年草〕
 おまる(虎子)便器《女性語》〔浮世風呂〕
 おまわり(御巡り)「～さん」〔柳傳〕
 おまんま(御飯)《幼児女性語》
 おみ(御身)「～たち・～さま」〔ロ氏文典〕
 おみ(御御)「～足」《女房詞》
 「～大きくお成りで」〔浮世風呂〕
 《女性語》
 「～おつけ」〔一説、おみ←みそ〕
 《女房詞》
 「～帯」《女房詞》
 おみき(御御酒・御神酒)「～徳利」〔永代蔵〕
 おみくじ(御御籤)「～をひく」
 おみこし(御御輿・御神輿)「～をあげる」
 おみそれ(御見逸れ)「～しました」
 おみや(御宮)「～参り・～入り」
 おみや〔←みやげもの〕《女房詞》〔狂言〕
 おみやげ(御土産)「～持参・～もの」
 おむかい(御向い)「～の家」
 おむすび(御結び)にぎりめし《女房詞》
 おむし(御蒸し)〔関西で〕みそ
 《女房詞》〔日ボ〕
 おむつ(御纏襟)〔←むつき〕おしめ《女房詞》

おめいこう（御命講）〔一説←お御影講〕
〔芭蕉句〕

おめかし〔←めかす〕「～や」

おめがね（御眼鏡）「～にかなう」

おめざ〔←目覚める〕《幼児女性語》
〔浮世風呂〕

おめし（御召）〔←召し物〕《女房詞》

おめだま（御目玉）「～を食う」

おめでた（御目出度・御芽出度）「～が近い」

おめでたい「～日・～人」

おめでとう《あいさつ語》

おめにかかる・おめにかける〔狂言〕

おめみえ（御目見得）〔狂言〕

おめもじ（御目文字）《女房詞》〔嬬山姥〕

おもうさま〔←母屋^{おもや}〕〔宮中で〕父上
《女房詞》

おもたせ（御持たせ）「～物」〔五大力恋緘〕

おもちゃ（玩具）〔←お持て遊び〕〔浮世風呂〕

おもと（御許）「…様～に」《女性語》

おもらい（御貰い）こじき

おもらし（御漏らし）〔←漏らす〕
《幼児女性語》

おやかた（御館）「～さま」

おやき（御焼き）焼豆腐・今川焼《女性語》

おやかましゅう（御喧しう）《あいさつ語》

おやすい（御安い）「～御用・お安くない仲」

おやすみ（御休み）《あいさつ語》

おやつ（御八つ）〔←八つ時〕午後の間食

おやま（御山）「～の大將」〔天草平家〕

およばれ（御呼ばれ）招待

および（御呼び）「～でない」

およびたて（御呼び立て）「～してすみません」

おれい（御礼）「～心・～参り」〔狂言〕

おれぎれき（御歴歴）名士たち〔傾情吾嬬鑑〕

4

以上337語、同じような基準で「おん」を調べますと、次の8語程度しか見られませんからその優勢ぶりは圧倒的と言うべきでしょう。

おんかた（御方） おんぞうし（御曹司）
おんたい（御大） おんち（御地） おんちゅう（御中） おんのじ（御の字） おん

(御身) おんもと (御許)

辻村敏樹氏がキリシタン資料で調査された結果によりますと(「吉利支丹資料に見える敬語接頭辞について」『敬語の史的研究』所収)、書きことば資料である『吉利支丹教義』(1592年、天草刊)はすべて「おん」(353例)で「お」は1例も見えませんが、口語訳の『平家物語』(1592年、天草刊)では「おん」113例に対して「お」は470例(4.1倍)、イソップの翻訳である『伊曾保物語』(1593年、天草刊)でも「おん」12例に対して「お」50例(4.1倍)といったふうです。「お」が口語的な語であったことを端的に示していますが、前表の調査では、8対337とすれば実に42倍強になります。勿論、厳密な意味では比較にもなりません、室町末と現代との「お」のあり方の、一往の目安にはなると思われます。

「お」は元来和語ですから、当然、和語に接する語が大部分ですが、337語中、漢語出自のものに接するのが46語、約11%見られます。漢語は「御」の音読み「ご」をとるのが一般ですから(ご真影、ご神灯、ごきげん、ごちそうetc)、これら「お」を固定した語は、普通の人には、もはや、もと漢語であったとは意識されないほどに和語化し日常語化した語ということになります。

おあいそ おあんばい おじぎ おしゃれ
おしんこ おせじ おたいこ おだいもく
おだぶつ おちょうし おてんき おてんと
さま おれきれき

ことに、一字の漢語の多いのが注意されます。

お菜^{さい} お札^{さつ} お産^{さん} お酌^{しやく} お重^{じゆう} お節^{せつ} お煎^{せん}
お膳^{ぜん} お代^{だい} お宅^{たく} お茶^{ちや} お鉢^{ひつ} お櫃^び お盆^{ぼん}

唐音の「^{きやん}お俠」や七草の「^{ぎやう}お形」,「お題目」から出た「^{おだ}おだを上げる」も広義ではこの類でしょう。「お茶」や「お札」は狂言記やキリシタン資料にも見える古いミオミことばです。

さすがにまだこの表には、いわゆる外来語に接したミオミことばは現れていません。オビール・オコーヒー・オズボン・オトイレの類は、辞書に登載されるほどには日本語として熟合していないものと思われます。勿論具体的言語としては、批難されながらもどんどんふえつつあ

る次第ですが、その意味でも、早く『吉利支丹教義』に見える「おんクルス(十字架)・おんアニマ(靈魂)」の2語9例は注目されます。

女房ことば出自の語が多いことは言うまでもありません。《女房詞》63,《女性語》20,《幼児女性語》9語ですから、この方面で計92語、各辞書に《女性語》の指定がなくとも「おしぼり・おつまみ」などのサービス業関係出自と思われる語をはじめ、《女性語》と目すべきものはかなり見られますから、この類の語はおそらく3割近くになるでしょう。

うち、ミオミミことばは次の4語です。

おしゃもじ おすもじ おはもじ おめもじ
もっとも多いのが、略したものに「お」をつける語で、略しかたは下略、音節は2音節(「お」を入れて3音節)のものが大半です。

おいた おうす おかがみ おかき おかけ
おかず おかわ おこし おこた おこわ
おさつ おしめ おたま おつむ おでん
おにぎり おねしょ おはぐろ おばけ
おひたし おひや おひら おふる おみや
おむつ おめざ おめし おやき

「かつおぶし」の頭音くり返しに「お」のついた「おかか」や香の物の「おこうこ」、さらに「おじや」や「おねば」もこの類とすれば、女房ことばの半数近くにもなるでしょう。語形を簡略にして「お」をつけるこの造語法は、根強く将来も生き続けるのではないのでしょうか。

「お」は本来名詞に冠するものですから、前掲の表でもその大部分は名詞接続の語ですが、転じて他の品詞にも接するようになります。

形容詞についたものとしては、女房ことばに
おいしい おいとしい おしろい

の3語があります。「おしろい」は「白いもの」の下略語ですから上述のグループですが、現在の語形としては形容詞なのでここにあげてみました。他に

お寒い お高い おめでたい お安い
があります。『天草本平家物語』にはすでに次のような例が見えます。

さしもお近う召使はせられたに…
「おえらがた」なども形容詞語幹接続ですからこの類、さらにあいさつ語の

お早う おめでとう おやかましゅう

なども入るでしょう。「おみ大きく」などは、「お」の次に、さらに「み」という丁寧語が加わった形ですが形容詞では他に同類を知りません。おそらくは「おみ帯・おみおつけ」の類と同じく、「お」の連続を避けるという発音上の問題がかかわっているものと思われます（「おみおつけ」の「おみ」は「おみそ」の下略という説もありますが）。「おみ足」にはすでに「お足」という別語がありました。「お御酒・お御籤・お御輿」などは、語原が分からなくなって敬意が薄れて感じられるようになった為に「お」の加わったものでしょう（「お御堂」などという言い方もあります）。「お宮」の宮も上代には「御屋」でありました。

《女性語》63語のほかに江戸時代以前の文献に用例の見られるものが90語余りあります。これは今後の調査によって幾分ふえるでしょうが、それにしても337語中約半数は現代に起こったミオミことばと思われます。これらのうち特に注意されるのは、動作語（動作を現わす動詞の連用形）に「お」の接するものが比較的多く見られるということです。

お預け お移り お返し お抱え お構い
おくるみ お越し お言添え お断り お好み
お浚い おしゃぶり おしゃべり お手
上げ お手つき お通し お直り お運び
お跳ね お払い お膝送り お捻り お見
それ お漏らし お呼ばれ お呼び お呼立て
江戸期には「お広め（御披露目）」のような女房ことばも見えますから、これらの語の中に江戸時代に生まれたものもあるかも知れませんが、いずれにしてもこの類の続出はごく近代に属するのではないのでしょうか。

室町時代に盛行した「お…ある・お…なさる」（…は動作性名詞または動詞連用形）の尊敬表現形式は、江戸後期には武家ことばから出た「お…になる」形式に座を譲り、これに対する「お…いたす」がやがて「お…する」という謙譲表現を成立させる過程は、諸家の研究によってほぼ明らかになってきました（湯沢幸吉郎・中村通夫・山田巖・辻村敏樹氏等）。一方、江戸後期には「お…だ」形式の、女性の親愛語といった性格の表現が多用され、また、目下の者に対するやわらかな命令表現「お…」（「なさい」の省略だ

が敬意の度合いは「お…だ」に同じ）の用法が起こって来ました（湯沢幸吉郎・辻村敏樹氏）。

サアサアお玉は衣をお脱なら爰へおよこし。

ソレお転でないよ（浮世風呂・二編上）

上記の、動作語ミオミことばは、こうした「お+動詞連用形（+…）」形式の独立したものではないでしょうか。少なくともその多発は、これらの表現形式にうながされたものに違いありません。尊敬表現の領分までおかしつつある現在の「お…する」形式の盛行は、ますますこの傾向に拍車をかけるものと思われます。

「弁護の余地もない」といわれる幼稚園ことば「お絵かきしましょう。お集まりですよ」の類は、まさにこうした時点に立つ表現の一つなのです。耳なれない人には「珍妙」に聞こえるかも知れませんが、大げさな物言いを借りれば、それは歴史的必然の所産でさえあるようです。つねに幾分かは敬意表現をとろうとする女性語的要素と、敬意というよりもむしろ親愛の意を表わそうとする保育語的要素とがあい寄ってその心理的背景をなしていることは言うまでもありません。

幼児教育が親愛語の持つような心情要素を不可欠とする以上、いたずらに悪もの呼ばわりするだけでなく、その積極的な効用をこそ探究すべきではないでしょうか。かつて、どこかの保育者集会でミオミことば自粛の申合せをしたという話を聞いたことがあります。そうした傾向が、単に表面的なきれいごとで止まる程度ならばまだしも、もしも、日々の保育活動のためらいと消極化につながるとすれば、その方をこそ重要視すべきだと思います。

〔後記〕以下、現代敬語の単純化・簡素化の傾向とミオミことばの問題、および、学生の保育実習前と後におけるミオミことば意識の変化の問題などを、学生の実態調査の分析を踏まえて述べる予定でしたが、紙幅と時間の関係で次の機会にまわすことにします。ご諒承ください。

なお、本稿は諸先学の学恩、ことに辻村敏樹氏の敬語史研究に負うところ大であります。記して感謝いたします。（46.1.12）